

大量に分泌される hCG が妊娠初期子宮内膜に与える影響については、尚明らかでない。そこで子宮内膜の PGs 産生能を指標とし hCG の影響を器官培養系を用いて検討した。

妊娠 6～8 週脱落膜を人工妊娠中絶時採取し、その約 10mg を培養に供した。medium として D. M. E. M. を用い、hCG 濃度が 10IU/ml, 100IU/ml, 1,000IU/ml, 10,000IU/ml となるように添加した。一方 PGs 合成酵素阻害剤として Indomethacin 10^{-5} M, 蛋白合成酵素阻害剤である Cycloheximide 10^{-5} M, RNA 合成阻害剤である Actinomycin $10\mu\text{g/ml}$ をそれぞれ添加し、95%O₂, 5%CO₂, 37°C の条件下で 24 ないし 48 時間培養した後 medium 中に遊離された PGs (PGE₂, PGF_{2 α} , 6-Keto-PGF_{1 α}) を RIA にて測定した。

妊娠初期脱落膜では、何れの PGs も産生されたが、PGF_{2 α} がもつとも著明であつた。又、妊娠週数別に検討したところ PGs の産生は、妊娠週数の増加に伴いむしろ減少する傾向を認めた。一方 hCG を添加することにより、各 PGs の産生は用量依存的に増加し、10,000 IU/ml にても Plateau を認めなかつた。又、hCG の PGs 産生に及ぼす影響を経時的に検討したところ添加後約 4～6 時間で産生増加の傾向を示した。しかし Indomethacin, Cycloheximide, 及び Actinomycin D 添加の何れの群も PGs 産生が抑制され、又、hCG による PGs 産生促進効果も抑制された。

以上のように妊娠初期脱落膜においても、PGE₂, PGF_{2 α} , 6-Keto-PGF_{1 α} が産生され、さらに hCG により用量依存的にそれらの産生が促進されることを器官培養系を用いて示した。これらの事より、絨毛より大量に分泌される hCG は、初期脱落膜での PGs 産生に強く関与し PGs を介して脱落膜化をさらに亢進させる可能性を示唆した。

414. 正常および異常内膜における Secretory Component (SC), IgA の免疫組織化学的研究

(自治医大) 大和田倫孝, 鈴木 光明
小川 雅利, 玉田 太郎

目的：正常内膜、異常内膜における SC, IgA の局在を免疫組織化学的に検討し、内膜癌と正常内膜との間に分化機能に差が認められるか否かを検討するとともに、内膜増殖症が前癌病変としての機能的性格を有するか否かを追究した。

方法：対象は正常内膜組織 70 例、内膜癌 46 例、内膜増殖症 31 例：異型 (ATH) 11 例、腺腫様 (ADH) 11 例、嚢胞性 (CH) 9 例である。新鮮凍結、パラフィン包埋切片作製後、酵素抗体直接法および間接法で SC, IgA の免疫組織化学染色を施行した。

成績：SC, IgA の染色結果を強陽性、弱陽性、陰性の 3 段階に分けて評価した。(1) SC は正常、異常ともに腺上皮にのみ局在した。組織型別では、1) 正常内膜：全月経周期を通して認められるが、分泌期に顕著であつた。加齢とともに陽性率は低下した。2) 内膜癌：正常内膜に比べ、著しい染色性の低下が認められた。即ち強陽性を示したものは正常内膜 71% (50/70) に対し、内膜癌では 11% (5/46) で、特に未分化型で低率であつた。3) 内膜増殖症：全体的に正常と癌の中間の染色性を示した。強陽性を示した頻度は ATH 18.1% (2/11), ADH 27.3% (3/11), CH 88.8% (8/9) であり、ADH と CH の間に明瞭な差が認められた。(II) IgA は SC とパラレルな動態を示した。但し局在部位は腺上皮以外に間質の形質細胞や血管内にも存在した。また癌の浸潤部位に IgA 陽性形質細胞が著明に認められた。以上より SC, IgA は癌化により著明に消失することが確認された。また内膜増殖症では ATH, ADH は癌類似の機能的性格を有し、一方 CH は正常内膜寄りの性格を有するといえよう。

独創点：SC, IgA に着目し、正常内膜と内膜癌の差を機能面から捉えようとした点。境界病変といわれる ATH, ADH が内膜癌類似の性格を有することを指摘した点。

質問 (弘前大・第一病理) 白取 祐子

1. 極性の乱れという意味を数えて下さい。
2. Cancer と normal の Endometrium では、SC や IgA の染まり方に違いはなかつたか。

回答 (自治医大) 大和田倫孝

1. 極性の乱れ：正常内膜では腺全体が陽性になるのに、癌では隣接する腺癌組織の間にも陽性、陰性が認められる。また陽性と陽性層の間に陰性層の存在することもある。このようなことを極性の乱れと表現した。
2. 癌の染まり方：細胞膜ばかりでなく、細胞質にも認められた。